

日本橋

花鏡泉



清二



河出



河出文庫

62B

日 本 橋

泉 鏡 花 著



河出書房

日 本 橋

昭和三十年九月十日 新裝版第一刷印刷
昭和三十年九月十五日 新裝版第一刷發行

定 價 九 拾 圓

著 者 泉 鏡 花
いづみ かがり

發行者 河 出 孝 雄
東京都千代田區神田小川町三ノ八

印刷者 藤 生 圓 太 郎
東京都千代田區神田多町二ノ四



發 行 所

株式會社

河 出 書 房
東京都千代田區神田小川町三ノ八

振替口座東京一〇八〇二番

關東印刷 落丁本・亂丁本はお取替え致します

目次

篠	八
檜木笠	一三
銀貨入	一九
手に手	二六
露地の細路	三五
柳に銀の舞扇	四〇
河童御殿	五三
榮螺と蛤	六三
おなじく妻	六八
横槩賦詩	八〇
籠の筒袖	八六
縁日がへり	九四

サの字千鳥	九六
梅ヶ枝の手水鉢	一〇二
口紅	一〇九
一重櫻	一一二
伐木丁々	一一九
空蟬	一二三
彩ある雲	一三〇
鴛鴦	一三四
生理學教室	一五〇
美舉	一五〇
怨靈比羅	一五五
一口か一挺か	一六一
艸冠	一六六
河岸の浦島	一七一
頭を釘	一七四

露 霜 一八〇

彗 星 一八三

綺麗な花 一八六

振向く處を 一八九

あはせかゞみ 一九二

振 袖 一九五

解 說 (目夏歌之助) 二〇三

河 出 文 庫

62B

日 本 橋

泉 鏡 花 著



河 出 書 房

著者略歴

本名鏡太郎。明治六年十一月四日金澤市下新町に生る。二十三年上京、翌年牛込の尾崎紅葉の門に入つた。二十六年始めて「冠彌左衛門」を書く。二十七年紅葉の名で「義血俠血」を發表、その天才的萌芽を示した。二十八年「夜行巡查」、「外科室」を出して注目され、いわゆる観念小説の名を得たが、翌年、「琵琶傳」、「化銀杏」を書いてその作風に一特質を示し、「照葉狂言」、「辰巳巷談」、「湯島詣」、「高野聖」等を出すに及んで獨自の世界を確立、その文章もいわゆる鏡花張りの彫琢の纏つた暗示的なものになつた。自然主義流行時代には一時雌伏したが、大正に入つて新藝術派の一人として文壇に重きを置かれた。代表作として「高野聖」、「歌行燈」、大正になつてからは「日本橋」が好評であつた。その他「紅雪録」、「春晝」、「婦系圖」等の名作ほか隨筆等もある。昭和十四年九月七日歿、享年六十七。

目次

篠	八
檜木笠	一三
銀貨入	一九
手に手	二六
露地の細路	三五
柳に銀の舞扇	四〇
河童御殿	五三
榮螺と蛤	六三
おなじく妻	六八
横槩賦詩	八〇
籠の筒袖	八六
縁日がへり	九四

サの字千鳥	九六
梅ヶ枝の手水鉢	一〇一
口紅	一〇九
一重櫻	一一二
伐木丁々	一一九
空蟬	一二三
彩ある雲	一三〇
鴛鴦	一三四
生理學教室	一五〇
美舉	一五〇
怨靈比羅	一五五
一口か一挺か	一六一
艸冠	一六六
河岸の浦島	一七一
頭を釘	一七四

露 霜 一八〇

彗 星 一八三

綺麗な花 一八六

振向く處を 一八九

あはせかゞみ 一九二

振 袖 一九五

解 說 (目夏歌之助) 二〇三

日
本
橋

篠蟹

一

「お客に舐めさせるんだとよ。」

「何を。」

「其の飴をよ。」

腕白ものの十ウ九ツ、十一二なのを頭に七八入。春の日永に生欠伸で鼻の下を伸して居る、四辻の飴屋の前に、押競饅頭で集つた。手に手に紅だの、萌黄だの、紫だの、彩つた螺貝の獨樂。日本橋に手の届く、通一つの裏町ながら、撒水の跡も夢のやうに白く乾いて、薄い陽炎の立つ長閑さに、彩色した具は一枚々々、甘い蜂、香しき蝶に成つて舞ひさうなのに、ブン／＼と唸るは虻よ、口々に喧しい。

此の聲に、清らかな耳許、果敢なげな胸のあたりを飛廻られて、日向に惱む花がある。

盛の牡丹の妙齡ながら、島田鬻の縄れに影が映す……肩揚を除つたばかりらしい、姿も大柄に見えるほど、荒い緋の、聊か身幅も廣いのに、黒縹子の襟の掛つた縞御召の一枚着、友染の前垂、同一で青い帯。緋鹿子の背負上した、それしやと見えるが仇氣ない娘風俗、つい近所か、日傘も翳さず、可愛い素足に臺所穿を引掛けたのが、紅と淺黄で羽を彩る飴の鳥と、打切飴の紙袋を兩

の手に、お馴染の親仁の店。有りはしないが暖簾を滑りさうにして出た處を、捌いた褌も淀むまで、むら／＼と其の腕白共に寄つて集られたものである。

「煮てかい、焼いてかい。」

「何、口からよ。」

と、老成た事を云つて、中でも矮小が、鼻まで届きさうな舌を上舐にべろんと行る、此奴が一藝。

「まあ、可笑しい。」

若い妓は、優しく伏目に莞爾して、

「お客様が飽なんか。大概御酒をあがるんですもので。」
で、一寸紙袋を袖で抱く。

「其だつてよ、其でもよ、髯へ押着けやがるぢやねえか。」

「不見手様。」と又矮小が、舌をべろんと舐す。

若い妓は柔しかつた。むつともしさうな頬は尙ほ細つて見えて、
「あら、大な聲をするもんぢやないことよ。」

「だつて、看板に掛けてやがつて。」と一人が前を遮るやうに、獨樂の手繰をずるりと伸す。

「違つたか。雪や氷、冷たい氷よ。そら水の上に、なんだ。」

「不見手様。」と矮小が頤でしやくる。

「矮小やい、舌を出せ。」

「出せよ、畜生。」

「うゝむ、うゝむ、然ら號令を掛けちや出せやしませんさ。」

と焦つて頭突きに首を振る。

「馬鹿、咽喉ほとけを搦んで居やがる。」

「ほゝゝ。」と、罪の無い皓齒しろはの答。

「畜生、笑つたな、不見手。」

と矮小は、ぐいと腕を捲つた。

「可厭、又……大な聲をして。」

「大な聲が何うしたんでえ。」

と、一人の兄哥さん、六代目の假聲こわいさ。

二

其の若い妓は、可愛い人形を抱くやりに、胸へ折つた片袖で、面を蔽ふ姿して、

「堪忍して下さいな。」

と遺瀨ななさりに悄れて云ふ。

「やあ、謝罪るぜ、ぐうたらやい。」

「不見手よりか心太だい。」

又しても此の高聲、はつとしたらしく袖を翳して、若い妓は隠れたさうに、

「内證なのよ、ねえ、後生よ。姉さんに聞えりと腹を立ちますわ。」

「何を云つてやんでえ。」

「分るもんか。」

矮小が抜からず、べろん、と出して、

「お前まへン許もとの姉さんは、町内の狂人ぢやねえかよ。」

「其その奴やつも怪しいんだぜ、お夥なつか間まだい。」

と背後から喚くと、間近に、(何)とか云ふ鮎屋の露地口。颯いたのやうにちよろりと出た同一腕白。

下心あつて、用意の爲に引込んで居たらしい。芥溜こみためを探したか、皿から浚つたか、笹ッ葉一束、

棒切の尖へ獨樂なはで引括つた間に合せの小道具を、さあ來い、と云ふ見で構へて、驅寄ると、

若い妓の島田の上へ突着けた、ばさくばツさり。」

が、黙つて、何にも言はないで、若い妓は俯向いて歩行き出す。

頸摺れに、突着け、突掛け、

「やあ、おいらんの道中々々！」

「大高、旨いぞ。」と一人が囁す。

「おつと任せの、千崎彌五郎。」